

青年期における「居場所」の研究

高橋 晶子・米川 勉

A study of “ibasho” in adolescence

Shoko Takahashi · Tsutomu Yonekawa

問 題

人は学校、家庭、自分の部屋、など複数の「居場所」を持っている。しかし、日常生活では特に「居場所」は意識されず、環境に対して違和感や疎外感を持ったとき初めて人は「居場所がない」と感じる。つまり「居場所」とは単なる物理的空間ではなく「その場所に対してどのような感情・意識・印象をもつか」（小沢、2000）をも含んだ心理的場所である。また藤竹（2000）は「居場所」を、自分が他人によって必要とされている「社会的居場所」と、自分であることを取り戻すことのできる「人間的居場所」に大別し、この2つを持っていることが「居場所」を持っていることであると述べている。「居場所」の心理的側面には対他者と対自分の2つがあり、この両面からの視点が必要であると思われる。小畑・伊藤（2001）の調査結果では、青年期の「心の居場所」として、友達・自分の部屋・家族が挙げられ、そこでの感情については「安心・安らぎ・気楽」が一位となっている。「居場所」はまず安心感を持てることが重要な要素になっている。青年期は、親から心理的に自立し、自分の生き方や考え方を模索するアイデンティティ形成の時期である。不安定な彼らの支えとして、「居場所」の果たす役割は重要であると思われる。

青年期の「居場所」に関する研究は、さまざまな視点からの論考がある。例えば「居場所」を発達的变化から捉えた研究として、高柳（2000）、富永・北山（2003）がある。高柳は過去の「居場所」の連想から「居場所」の変遷を検討しているが、発達段階における「居場所」の実態の調査が中心である。富永・北山は、家庭場面、友人場面、クラス場面での安心感、受容的環境、連帯感、役割を調査したもので、家庭や友人関係が時期に応じて様々な「居場所」となり青年期を支えていることを考察している。これは「居場所」を場所に限定し、そこでの実感を測定し「居場所」の程度をみるものである。

また「居場所」は学校教育の現場では、不登校や引きこもりとの関連で用いられることが多い（芹沢、2000）。当初は避難場所という意味で使われていた「居場所」が、最近では自己回復の場、自己安定化の場という意味での使用が多くなった（住田・南、2003）。また心理臨床の

現場でも、カウンセリングそのものを、クライアントの日常生活の一部として、クライアントを側面深く抱える「居場所」であると捉え、「居場所」の役割の重要性が指摘されている（竹森、1999）。このように「居場所」は、実践場面でも重要なキーワードとなっている。

溝上（2005）はエリクソンの同一性の概念を、青年期の発達現象を理解する二つの側面として解説している。一つは「児童期から青年期に入って崩れる自己同一性をおとな社会の価値や規範を取り込んだ形でふたたび取り戻すこと」、もう一つは「心理社会的同一性（これが私だという自己ラベルと他者から見た私の同一）を得ること」である。また小此木（1974）は、「青年期の課題は、子ども時代から準備された、たくさんの『…としての自分』（同一化）を、おとなの自我によって社会的現実の中で選択しなおすことにある」と、別の言葉で述べている。また小澤（2000）はエリクソンの、「青年は、自由な役割実験を通して、社会の中に適所を発見する。…この適所を発見する中で、青年は、内的な連続性と社会的な斉一性の確かな感覚を得るのである。」を引用して、この「適所」が「居場所」であり、「居場所」を得ることと、アイデンティティを持つこととの関連性に言及している。そこで、アイデンティティという捉え難いものを、「居場所」での実感という視点を用いて、個人の側からみることが可能ではないかと考えた。「アイデンティティ」を、小此木の「多くの同一化」という「下位アイデンティティ」としてとらえ、一つの同一化の確立された「適所」が「居場所」であると考えた。このように「居場所」と「アイデンティティ」の関連を見ることで、一つの仮説が描ける。「居場所」の確保がアイデンティティを確立したことを表し、アイデンティティを確立することによって「居場所感」が強まる。つまり「居場所」と「アイデンティティ」は表裏一体の関係なのである。我々は日常、アイデンティティを自覚することはない。本研究では、日常語である「居場所」に注目し、そこでの実感からアイデンティティを見ていこうとするものである。

青年期の「居場所」とアイデンティティの関連に言及したものとして、堤（2003）と小澤（2002、2003）のものがある。小澤はアイデンティティを実存的視点で考察するために「居場所」という見方をするが、それは、「自

分が自分であることの基準は個人の中にいくつかあり、それに対応していくつかの居場所がゲシュタルトをなしている」と、とらえているからである。小澤の論からは、居場所とアイデンティティの関わりに関して多くの示唆を得た。堤は、「居場所」がない感覚と自我同一性混乱の関係を検証しており、本研究と方法的にも重なる部分がある。しかし「居場所」がないという感覚と「ほんとうの自分がない」ことの関連に関しては今後の検討課題としている。

子ども時代から培われた「同一化群」は、青年期において取捨選択され、社会的なものに現実化されるが、そのプロセスを「居場所感」との関連で見ていくのがこの論の眼目である。例で説明すると、学校という同一化の対象に出会い、関わるなかで安心感や所属感を持つようになり、学校での「居場所感」を実感するようになったことは、「学校アイデンティティ」が確立していくことに対応しているという見方である。

【予備調査】

目 的

青年期の人々が、日常生活で「居場所」をどのようにとらえているかを明らかにするため、女子大生を対象に面接調査を行った。

方 法

調査対象：女子大生（3年生）15名

調査時期：2006年4月下旬

調査内容：

以下の4つの質問項目からなる質問紙に、無記名で自由記述を求める。

質問1 (イ) これまでに自分自身の「居場所」について考えたことがあるか。

(ロ) それはどんな時か。

質問2 (イ) 「居場所」を必要としたことがあるか。

(ロ) それはどんな時か。

質問3 (イ) 自分の「居場所」を2つあげる。

(ロ) なぜそこが「居場所」になっているのか。

質問4 自分にとって「居場所」とはどんなところか。

結果と考察

(1) 「居場所」について (表1)

「居場所」を意識したことの有無を尋ねたところ、11名があるという回答で、ネガティブな気持ちの時であった。また必要性に関しては、全員があるという回答であった。「居場所」について考えた時の内容は環境との違和感が主で、「自分と向き合った時」という回答もあった。しかし「居場所」を必要とした時は、不安や孤独だけではなく、環境からの拒絶感を強く意識したものである。これは「居場所」が、失われて初めて意識される(北山、1993)という指摘に合致した結果となった。大学生にとって「居場所」があることは、自分の存在の根があることで成長を支える基盤が確保されていることと言えよう。

(2) 「居場所」とその理由 (表2)

具体的な「居場所」として家族と友人が多かったが、特に家族は全員が「居場所」と回答した。ある場所を「居場所」と意識するのは、まず安心感が基本にあり、そこで人と出会い、関係性を築きつつ、理解されたり必要とされたりして、その場所が「居場所」となるという発達の側面が指摘できる。

(3) 「居場所」の内容 (表3)

「居場所」とは、居心地のよさがあって安心できる所である。このような確かな安心感の存在は、「青年期のアイデンティティ基礎の根にあって土台となるもの」(鑑、2002)と指摘されており、「居場所」で得られる安心感は青年期において重要なものであると考えられる。「居場所」とは自分が受容され、自分の存在が実感でき、成長を支える場所であることが結果から明らかに読み取れる。

予備調査の結果から、アイデンティティ形成過程にある青年期の人々にとって、「居場所」は、安心感を与えられ、他者との連帯感や自分の存在を実感できる場であることが表明されている。さらに回答の中には、「自分の存在を確かめる」「自分を高める」「自分は誰か、どこに行けばいいかを考える」など、アイデンティティ確立

表1 「居場所」について

自分の居場所について考えたことがある	居場所を必要としたことがある
はい (11) いいえ (4)	はい (15) いいえ (0)
どんな時か	どんな時か
人間関係がうまくいかなかった時	さみしかったり不安になった時
さびしい時	孤独を感じた時
おもしろくない時	支えてほしいと思った時
一人である時	自分が必要とされていないと感じた時
一人になりたい時	自分を思ってくれる人がいない時
自分は誰か、どこに行けばいいかなど考えるとき	不安で前に進めない時

表2 「居場所」とその理由

<p><u>家・家族 (15)</u></p> <p>ありのままの自分でいられる 安心感がある 一員と思える 落ち着く 自分を必要としている 自分を理解してくれる 大事にされていると感じる リラックスできる</p> <p><u>自分の部屋 (4)</u></p> <p>落ち着く 自分との対話がしっかりできる 一人きりになれる 素の自分でいられる</p> <p><u>大学 (1)</u></p> <p>何でも話せる友達がいるから</p>	<p><u>友人 (6)</u></p> <p>安心感がある 一緒にいて楽しい 落ち着く 共有できるものがある 自分の存在を認めてくれる 自分を必要としている 親身になってくれる 相談に乗ってもらえる</p> <p><u>恋人 (2)</u></p> <p>ありのままの自分を出せる 自分の良いところも悪いところも理解してくれる 自分を受け止めてくれる 素の自分でいられる</p> <p><u>バイト先 (2)</u></p> <p>なじんだ場所だから落ち着く 友人がいるから</p>
---	---

表3 「居場所」の内容

<p>安心できる場所 自分が必要とされているところ 自分の存在意義があるところ 自分の存在が感じられる空間 自分もその一員と思えるところ 逃げ場 本当の自分が出せるところ</p>	<p>落ち着ける場所 自分を高めていける場所 居心地がいいところ 今の自分をそのまま受け入れてくれるところ 悩み事が解消する場所 生きていてもいいんだと思える場所</p>
---	--

に向かって成長している状態を示すものがあつた。これは「居場所」とアイデンティティの関わりを示唆するものである。

【本調査】

目 的

青年期の高校生、大学生を対象に、彼らの「居場所」での実感をより分化した要素として把握し、その特色を明らかにすることを目的として、「居場所実感尺度」を新たに作成する。また「居場所」と「アイデンティティ」は表裏一体の関係であるとする本研究の立場から、個々の要素とアイデンティティの確立度との間には関連があると考えられるので、その関連性についても検討する。そして、「居場所」としての実感が強いとアイデンティティの確立度が高く、アイデンティティ確立度が高いと「居場所」としての実感が強い、という仮説を検証する。

方 法

1) 調査対象

- ・高校3年生265名 (男性141名 女性124名)
 平均年齢17.6歳
- ・大学2、3年生182名 (男性78名 女性104名)

平均年齢20.2歳

2) 調査時期

2006年10月～11月

3) 調査内容

質問項目群の概要は以下の通りである。

(1) **アイデンティティ尺度**

下山 (1992) の「アイデンティティ尺度」(以下 ID 尺度) を用いた。下山の尺度は、「発達早期の基本的信頼感や自律性に関わる内容」の「アイデンティティ基礎」10項目 (以下「ID 基礎」) と、「青年期後期の発達課題である主体性、個性、社会性に関わる内容」の「アイデンティティ確立」10項目 (以下「ID 確立」) の、2因子で構成されている。各項目について、「あてはまる」(5点)、「ややあてはまる」(4点)、「どちらともいえない」(3点)、「あまりあてはまらない」(2点)、「あてはまらない」(1点) の5段階評定でこれらの項目に回答をもとめた。

(2) **「居場所」実感尺度**

予備調査を通して得られた様々な「居場所」の記述を15項目に集約し「居場所実感尺度」として独自に作成した。「家族といる場面」(以下、家族場面)、「親密な友人といる場面」(以下、友人場面)、「学校生活場面」(以下、学校場面)の3つの場面について、「あてはまる」(5点)から「あてはまらない」(1点)までの5段階評定でこ

これらの項目に回答を求めた。

結果

1. 居場所実感尺度の因子分析

居場所実感尺度を高校生と大学生別に、「家族という場面」「親密な友人という場面」「学校生活場面」各15項目に対して、主因子法による因子分析を行った。そして、固有値や結果の解釈可能性から3因子解が適当であると判断した。バリマックス回転後の因子パターンと寄与・寄与率を表4-1～表4-3に示す（高校・大学と場面

の相違による多少の項目の変動はあるが、ほとんどの項目に一致がみられたため、ここでは高校のみ表を示した）。最終的に各場面に共通する3因子を決定した。第1因子は、「自分が周りの人たちから守られている」という感覚を中心としたものであり、「安心」因子と命名した。第2因子は、「自分が周りの人たちから支えられ、受止められている」という感覚を中心としたものであり、「支え」因子と命名した。第3因子は、「自分がその集団の一員である」という感覚を中心としたものであり、「所属」因子と命名した。その結果、家族場面の3因子（家族安心・家族支え・家族所属）、友人場面の3因子（友

表4-1 「家族場面」での居場所実感尺度因子分析結果（バリマックス回転後）〈高校生〉

項 目	F 1 ($\alpha = .93$)	F 2 ($\alpha = .94$)	F 3 ($\alpha = .81$)
<u>家族安心</u>			
3 本心に落ち着くことができる	0.87	0.29	0.22
4 心の底からリラックスできる	0.83	0.26	0.28
2 どんな時でも安心できる	0.75	0.33	0.28
1 とても楽しいと感じる	0.64	0.35	0.28
5 今の自分をそのまま受け入れてくれる	0.61	0.44	0.29
6 大事にされている	0.50	0.48	0.38
<u>家族支え</u>			
13 不安で前に進めない時に支えてくれる	0.34	0.82	0.21
12 落ち込んだ時も嬉しいときも受止めてくれる	0.40	0.76	0.24
15 成長したいという気持ちを応援してくれる	0.27	0.69	0.41
14 自分の能力を認めてくれる	0.28	0.66	0.46
7 自分を理解してくれる	0.44	0.62	0.37
11 価値観を共有できる	0.30	0.60	0.44
<u>家族所属</u>			
10 自分を必要としてくれる	0.37	0.39	0.63
9 自分の役割がある	0.24	0.26	0.58
8 自分も一員と思える	0.49	0.39	0.53
因子寄与	4.19	4.08	2.34
寄与率 (%)	27.93	55.12	70.74

因子抽出法：主因子法

表4-2 「友人場面」での居場所実感尺度因子分析結果（バリマックス回転後）〈高校生〉

項 目	F 1 ($\alpha = .91$)	F 2 ($\alpha = .90$)	F 3 ($\alpha = .89$)
<u>友人安心</u>			
3 本心に落ち着くことができる	0.86	0.32	0.22
4 心の底からリラックスできる	0.81	0.29	0.29
2 どんな時でも安心できる	0.76	0.28	0.27
5 今の自分をそのまま受け入れてくれる	0.58	0.25	0.48
1 とても楽しいと感じる	0.48	0.40	0.20
<u>友人支え</u>			
13 不安で前に進めない時に支えてくれる	0.33	0.79	0.24
12 落ち込んだ時も嬉しい時も受止めてくれる	0.33	0.67	0.36
15 成長したいという気持ちを応援してくれる	0.24	0.67	0.40
11 価値観を共有できる	0.36	0.59	0.34
14 自分の能力を認めてくれる	0.32	0.53	0.50
<u>友人所属</u>			
10 自分を必要としてくれる	0.28	0.33	0.73
9 自分の役割がある	0.17	0.25	0.73
8 自分も一員と思える	0.46	0.38	0.58
7 自分を理解してくれる	0.45	0.39	0.56
6 大事にされている	0.44	0.41	0.55
因子寄与	3.77	3.27	3.21
寄与率 (%)	27.93	55.12	70.74

因子抽出法：主因子法

表4-3 「学校場面」の居場所実感尺度因子分析結果（バリマックス回転後）〈高校生〉

項 目	F 1 ($\alpha = .90$)	F 2 ($\alpha = .94$)	F 3 ($\alpha = .92$)
学校安心			
4 心の底からリラックスできる	0.88	0.17	0.20
3 本当に落ち着くことができる	0.85	0.21	0.26
2 どんな時でも安心できる	0.81	0.28	0.18
5 今の自分をそのまま受け入れてくれる	0.62	0.40	0.30
1 とても楽しいと感じる	0.54	0.29	0.19
学校所属			
10 自分を必要としてくれる	0.32	0.77	0.38
8 自分も一員と思える	0.28	0.74	0.43
9 自分の役割がある	0.24	0.69	0.35
7 自分を理解してくれる	0.37	0.64	0.43
6 大事にされている	0.45	0.57	0.33
11 価値観を共有できる	0.37	0.53	0.51
学校支え			
15 成長したいという気持ちを応援してくれる	0.27	0.34	0.81
14 自分の能力を認めてくれる	0.24	0.40	0.77
13 不安で前に進めない時に支えてくれる	0.24	0.41	0.69
12 落ち込んだ時も嬉しい時も受止めてくれる	0.40	0.48	0.54
因子寄与率 (%)	3.90	3.70	3.29
	25.99	50.69	72.59

因子抽出法：主因子法

人安心・友人支え・友人所属)、学校場面の3因子(学校安心・学校支え・学校所属)、の計9因子を決定した。尺度の信頼性を求めたところ、Cronbachの α 係数が9因子全てにおいて0.81~0.94範囲にあり、信頼性が保障された。以上より、場面ごとの15項目の合計を「場面得点」、9因子に含まれる項目の評定値の平均値を下位尺度得点とし、以降の分析に用いた。また「安心」「支え」「所属」3因子が、「ID基礎」「ID確立」に影響を与えるという仮説を立てた。

2. 測度の検討

各測度の平均値、標準偏差を表5に示す。高校生と大学生ともに数値が高い順に友人、家族、学校となっており、青年期における友人の重要性を示す結果となっている。

表5 各測度の平均値、標準偏差

	高校生		大学生	
	平均	SD	平均	SD
アイデンティティ				
基礎	2.84	0.69	2.79	0.80
確立	3.38	0.62	3.44	0.72
家族				
安心	3.83	0.96	3.75	0.95
所属	3.90	0.92	4.08	0.82
支え	3.62	1.02	3.77	1.06
友人				
安心	4.33	0.71	4.19	0.79
所属	4.05	0.77	4.06	0.81
支え	4.12	0.80	4.08	0.78
学校				
安心	3.07	0.88	2.88	0.92
所属	3.26	0.84	3.03	0.93
支え	3.28	0.87	3.09	0.99

る。高校生と大学生間の値の増減をみると、家族場面において「安心」は減少し「所属」「支え」は増加している。これは、高校生はまだ家族の庇護が必要な時期であるが、大学生は家族という安全空間から徐々に自立しているが、家族の一員であることや支えが必要であることを表していると思われる。友人場面においても高校生の方が「安心」が高い。学校場面においては全ての数値が減少しており、高校生はまだ学校に依存した状態であり、大学生はある程度主体的に学校生活を送っている結果と思われる。

4. 学校別のID得点の差の検討

高校生と大学生の2群の、ID尺度の下位尺度である「ID基礎」「ID確立」の得点を従属変数とした2要因の分散分析を行った(表6)。その結果、有意な交互作用はみられなかった。

表6 学校とIDによる分散分析結果

	学校		主効果	交互作用
	高校	大学		
ID	基礎	28.18 (7.01)	27.91 (8.01)	173.00**
	確立	33.85 (6.21)	34.37 (7.18)	

上段：平均値、下段：標準偏差
* $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

5. 因果関係の検討

(1) 高校生と大学生の傾向

家族、友人、学校3つの「場面得点」が、「ID基礎」と「ID確立」得点それぞれに与える影響を検討するために、「場面得点」を独立変数とし、「ID基礎」と「ID

確立」得点を従属変数とする重回帰分析を行った(表7)。

高校生では「友人」と「学校」から「ID基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であった。また「家庭」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数は1%水準で有意で「友人」、「学校」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数は0.1%水準で有意であった。結果から、高校生では「友人」と「学校」が「ID基礎」に関連があり、とくに「ID確立」には強い関連があることが明らかにされた。また「家庭」は「ID確立」に関連があるが、「ID基礎」には関連がないという結果が得られた。

大学生では「友人」から「ID基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であったが、「家族」と「学校」は有意ではなかった。また「友人」と「家族」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数は1%と0.1%で有意であったが、「家族」は有意ではなかった。結果から、大学生でも「友人」が「ID基礎」に影響を与え、「ID確立」には「友人」と「学校」が影響を与えていることが明らかにされた。「家族」は「ID基礎」「ID確立」に影響を与えていないという結果が得られた。

表7 場面ごとの重回帰分析結果

	高校生		大学生	
	ID基礎	ID確立	ID基礎	ID確立
	β	β	β	β
家族	-.01	.17**	-.15	-.02
友人	.15*	.27***	.21*	.17*
学校	.16*	.24***	.14	.25**
R ² 乗	.06*	.28***	.066*	.12***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

(2) 3因子とIDの関連

3場面における「居場所実感尺度」9つの下位尺度得点が、「ID尺度」の2つの下位尺度得点に与える影響を

検討するために、場面ごとの「安心」「支え」「所属」得点を独立変数、「ID基礎」「ID確立」を従属変数とする重回帰分析を行った(その結果を表8-1、表8-2に示す)。

高校生は家族場面では、「所属」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であった。友人場面では、「安心」と「支え」が5%水準で、「所属」からは0.1%水準で「ID確立」に対する標準偏回帰係数が有意であったが、「ID基礎」に対しては有意ではなかった。学校場面では、「所属」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数が1%水準で有意であった。結果から、高校生では「所属」が「ID確立」に強い影響があることが示された。

大学生の家族場面では、「安心」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数が5%水準の負の値で有意であった。友人場面では、標準偏回帰係数が有意であるものはなかった。学校場面では、「所属」から「ID基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準の負の値で有意であった。また、「支え」から「ID確立」に対する標準偏回帰係数が1%水準の負の値で有意であった。

(3) 因子別にみた高校生と大学生の傾向

3場面での3因子得点が、「ID尺度」の2つの下位尺度得点がそれぞれに与える影響を検討するために、「家族安心」「友人安心」「学校安心」<「家族所属」「友人所属」「学校所属」><「家族支え」「友人支え」「学校支え」>を独立変数、「ID基礎」「ID確立」を従属変数とする重回帰分析を行った(その結果を表9-1、表9-2に示す)。

高校生では、「友人安心」から「ID基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であったが、「家族安心」と「学校安心」は有意ではなかった。「ID確立」に対し

表8-1 場面ごとの重回帰分析結果(高校生)

	家族場面		友人場面		学校場面	
	ID基礎	ID確立	ID基礎	ID確立	ID基礎	ID確立
	β	β	β	β	β	β
安心	-.17	.14	.01	-.18*	.01	.09
支え	.21	-.02	.20	.22*	.09	.04
所属	.08	.30*	.12	.43***	.14	.30**
R ² 乗	.03*	.16***	.05**	.24***	.05**	.17***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

表8-2 場面ごとの重回帰分析結果(大学生)

	家族場面		友人場面		学校場面	
	ID基礎	ID確立	ID基礎	ID確立	ID基礎	ID確立
	β	β	β	β	β	β
安心	-.08	-.28*	.15	-.07	.22	.07
支え	.09	.22	-.12	.17	.34**	.06
所属	-.03	.21	.19	.20	-.34*	.20
R ² 乗	.00	.06*	.05*	.09*	.08**	.10***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

表9-1 因子とIDの重回帰分析結果(高校生)

	安心		支え		所属	
	ID 基礎	ID 確立	ID 基礎	ID 確立	ID 基礎	ID 確立
	β	β	β	β	β	β
家族	-.03	.23***	.06	.18**	.01	.18**
友人	.14*	.16**	.15*	.28***	.11	.30***
学校	.12	.20**	.14*	.20**	.18**	.23***
R 2 乗	.04*	.19***	.07***	.25***	.06**	.30***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

表9-2 因子とIDの重回帰分析結果(大学生)

	安心		支え		所属	
	ID 基礎	ID 確立	ID 基礎	ID 確立	ID 基礎	ID 確立
	β	β	β	β	β	β
家族	-.14	-.07	-.07	.07	-.13	.08
友人	.21*	.14	.10	.20*	.24**	.19*
学校	.15	.24**	.20*	.20*	.06	.25**
R 2 乗	.08**	.09**	.06*	.12***	.06*	.15***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

ては、「家族安心」が0.1%水準、「友人安心」「学校安心」が1%水準で標準偏回帰係数が有意であった。特に「家族安心」が「ID 確立」に対して高い値を示している。「学校所属」から「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が1%水準で有意であった。また「ID 確立」に対しては標準偏回帰係数が、「家族所属」が1%水準、「友人所属」「学校所属」は0.1%水準で有意であった。「友人支え」「学校支え」から「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であった。また「ID 確立」に対しては、「家族支え」「学校支え」が1%水準、「友人支え」が0.1%水準で標準偏回帰係数が有意であった。結果から、「居場所感」は「ID 基礎」よりも「ID 確立」と関連があることが明らかになった。

大学生では、「友人安心」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であったが、「家族安心」「学校安心」とは有意ではなかった。「学校安心」の「ID 確立」に対する標準偏回帰係数は1%水準で有意であったが、「家族安心」「友人安心」とは有意ではなかった。「友人所属」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が1%水準で有意であった。また「友人所属」は5%水準で、「学校所属」は1%水準で、「ID 確立」に対する標準偏回帰係数が有意であった。「学校支え」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数は1%水準で有意であったが、「家族支え」「学校支え」は有意ではなかった。「友人支え」「学校支え」の「ID 確立」に対する標準偏回帰係数は5%水準で有意であったが、「家族支え」は有意ではなかった。結果から、学校場面は大学生の「ID 確立」と関連があり、友人は「ID 基礎」と関連があることが明らかになった。

(4) 因子別にみた高校生と大学生の比較

(3)の分析結果を因子毎に、高校生と大学生の比較のた

め並べて表示した(その結果を表10-1~表10-3に示す)。

①「安心」因子とID

高校生では、「友人安心」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であり、「家族安心」が0.1%、「友人安心」と「学校安心」は1%水準で、「ID 確立」に対する標準偏回帰係数が有意であった。大学生では、「友人安心」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であり、「学校安心」の「ID 確立」に対する標準偏回帰係数は1%水準で有意であった。高校生の「ID 確立」には、安心感が重要であることが明らかになった。また大学生の「ID 確立」には、学校での安心感が重要であることが明らかになった。

表10-1 安心因子の重回帰分析結果

	高校生		大学生	
	ID 基礎	ID 確立	ID 基礎	ID 確立
	β	β	β	β
家族	-.03	.23***	-.14	-.07
友人	.14*	.16**	.21*	.14
学校	.12	.20**	.15	.24**
R 2 乗	.04*	.19***	.08**	.09**

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

②「支え」因子とID

高校生では、「友人支え」と「学校支え」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であり、「家族支え」と「学校支え」は1%水準で、「友人支え」は0.1%水準で、「ID 確立」に対する標準偏回帰係数が有意であった。大学生では、「学校支え」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が5%水準で有意であり、「友人支え」と「学校支え」の「ID 確立」に対する標準偏回

帰係数が5%水準で有意であった。高校生の「ID 確立」には周囲からの支え、励ましが重要であることが明らかになった。大学生も、友人と学校の支えが重要であるが、家族からの支えは必要としなくなっていることが示されている。

表10-2 支え因子の重回帰分析結果

	高校生		大学生	
	ID 基礎 β	ID 確立 β	ID 基礎 β	ID 確立 β
家族	.06	.18**	-.07	.07
友人	.15*	.28***	.10	.20*
学校	.14*	.20**	.20*	.20*
R 2 乗	.07***	.25***	.06*	.12***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

③「所属」因子とID

高校生では、「学校所属」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が1%水準で有意であり、「家族所属」が1%水準、「友人所属」「学校所属」は0.1%水準で「ID 確立」に対する標準偏回帰係数が有意であった。大学生では、「友人所属」の「ID 基礎」に対する標準偏回帰係数が1%水準で有意であった。「友人所属」が5%水準で、「学校所属」が1%水準で「ID 確立」に対する標準偏回帰係数が有意であった。高校生の「ID 確立」には、生活場面での所属感が重要であることが明らかになった。大学生も「ID 確立」に対して、友人と学校への所属感が関連があるが、家族での所属感はIDと関連がみられない。

表10-3 所属因子の重回帰分析結果

	高校生		大学生	
	ID 基礎 β	ID 確立 β	ID 基礎 β	ID 確立 β
家族	.01	.18**	-.13	.08
友人	.11	.30***	.24**	.19*
学校	.18**	.23***	.06	.25**
R 2 乗	.06**	.30***	.06*	.15***

* $P < .05$, ** $P < .01$, *** $P < .001$

β : 標準偏回帰係数

考 察

1. 「居場所」の因子

「居場所」の因子として、「安心」「支え」「所属」を得た。その場所が「居場所」であることの実感は、安心感、

支えられ感、所属感で構成されていることが明らかになった。この結果は、マズローの欲求論の、基礎の欲求である「生理的欲求」「安全欲求」から「所属と愛情の欲求」「他者承認の欲求」、さらに「自己実現の欲求」という階層構造を想起させる。「居場所」であることの実感は、これらの欲求が満たされているかどうかと関係しているといえる。また「居場所」の要素は、「安心」から「支え」「所属」へと階層をなし、成長していく動きがあることも推測できる。

2. 「居場所」の実感とアイデンティティの確立度の関連

図1は、居場所感とID形成過程との関連を示したものである。ある集団で、安心感を実感できることは初期のIDが形成されたことを示し、支えられ感、所属感を実感できることは、IDの形成が進み、集団への同一化が果たされつつあることを示している。ある集団への同一化が果たされると次の集団へと進み、IDは拡大し統合される。小此木(1974)は、このプロセスを通して「自己価値を高めるような同一性を自分のものにしようかどうか」が、自分らしい人生を送れるかどうかの分かれ目であると言う。青年期においてどの同一性への同一化を選ぶかは、重要な問題である。

高校生は家族場面と「ID 確立」との関連がみられたが、大学生では、家族場面とIDに関連がみられなかった。これはまだ「ID 確立」に家族場面が必要な高校生と、家族場面を必要としなくなった大学生の差が出ていると思われる。青年期において友人はIDに強い関連がみられる。とくに高校生の「ID 確立」には、友人との関わりが重要であることが示された。学校場面は、高校生・大学生ともに「ID 確立」に大きな関連がみられる。これらのことから、青年期において「ID 確立」には友人場面と学校場面が重要であることが明らかになった。友人と学校は、家族とは異なる他者と関わる場である。そこでの体験が自己を育て、ID発達を促すものと思われる。

3. 「居場所感」とアイデンティティの関係

高校生では、どの場面においても所属感と「ID 確立」の関連が見られた。その集団の一員であるという実感は、「ID 確立」との関連が明らかになった。大学生では「学校所属」と「ID 基礎」に負の関連がみられるが、高校生に比べ、学校の拘束力の緩い大学生との差が出ている

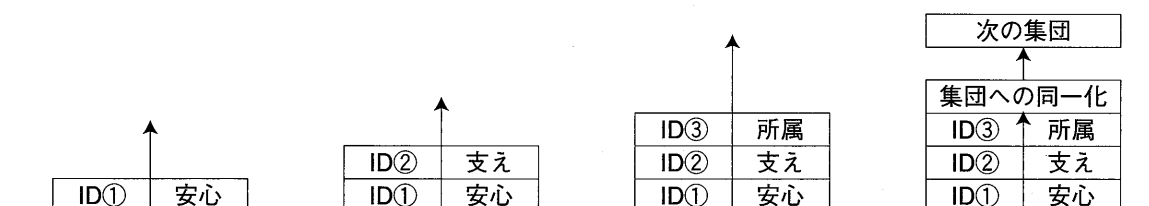


図1 居場所感とID形成過程モデル図

と思われる。また「学校支え」と「ID基礎」に関係が出てくる。これは所属感とは異なり、支え感は成長や能力に関わる内容であり、今後社会に出て行く準備段階の大学生は、大学で資格取得などの能力獲得を目指しており、「ID基礎」との関係は大きいと考えられるのではなかろうか。

4. 各因子とアイデンティティの関係

①学校別

高校生では、「友人安心」「友人支え」が「ID基礎」に、「安心・所属・支え」全ての因子が「ID確立」に対して強い関連がある。大学生では学校での「安心・支え・所属」が「ID確立」と関連がある。大学生は学校場面が「ID確立」と大きな関連があることが明らかになった。

②高校生と大学生の比較

安心因子は高校生の方が「ID確立」と強い関連がある。大学生は「友人安心」の「ID確立」への値が高い。高校生は、多くの生活場面で得られる安心感が、「ID確立」に関係していることが明らかになった。高校生はまだ安全基地を必要としており、そのことが「ID確立」を促す関係であることが示された。大学生は家族からの安心感を必要としておらず、家族場面からの自立がうかがえる。しかし友人からの安心感はまだまだ必要で、彼らの主な生活圏は家族から友人へと移行していることを示している。学校での安心感は高校生以上に「ID確立」と関連があり、これは家族からは自立したもののまだ社会に出る時期ではないので、学校という安全基地にいる状態を反映しているものであろう。

所属因子は、高校生ではすべての場面の所属感が「ID確立」と関連がある。その集団の一員であるという実感は、自分が認められていることであり、自信を与えるものである。大学生は、「ID基礎」に友人所属が関連している。支え因子は、高校生の「ID確立」に関連がある。自分が支持されているという実感は、自己探求の大きな支えとなるものと思われる。

実感という気持ちの視点から、「居場所」と「アイデンティティ」の関係を検討した結果、両者の間には強い関連が見られた。とくに高校生は、「居場所」での安心感、所属感、支え感の全てがアイデンティティに関連することが明らかになった。心理的場所としての「居場所」は、そこでの実感という面からアイデンティティ形成の段階をとらえていくことができると考えられる。本研究ではアイデンティティという捉えがたいものを、「居場所」での実感という視点から見ることで、アイデンティティを実体のあるものとしてとらえることができた。

「居場所」を取り上げたのは、不登校生徒の「学校に居場所がない」という言葉に触発されたからである。不登校という問題を「居場所」との関連で見ると、多くは具体的居場所を用意するという発想になりがちであった。

もちろん不登校の生徒のためのフリースクールやフリースペースは必要であるが、そこが彼らの「居場所」になるかどうかは本人が決めることで、周囲は強制できない。「居場所」の要素として、「安心」「支え」「所属」を抽出したが、援助する側が具体的場所と同時にこの3要素の重要性に留意することで、そこは彼らの本当の「居場所」になる。また研究結果から、「居場所」がない状態とは、アイデンティティの確立度の低いことを反映していることが明らかになった。「不登校」状態は、学校アイデンティティの確立度の低い状態、「同一化」の取捨選択がうまくいっていない状態と言い換えることができる。「居場所」という言葉を手がかりにして、「不登校」生徒を理解する一つの視点を提供できたのではないかと思う。今後の課題は、「居場所」の実感からアイデンティティの確立度を見ていく方法を、さらに洗練していくことである。そのためには下山の「ID尺度」をもう一度見直すことと、独自に作成した「居場所実感尺度」の項目を再吟味することを考えている。

付記

本論文は修士論文に加筆・修正を加えたものである。ご指導いただきました米川勉教授に感謝いたします。また、お忙しい中、調査にご協力いただきました高校生と大学生の皆様ならびに現場での質問紙の配布・回収にあたっていただきました先生方に、心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- J. クロガー (榎本博明編訳) 2005 アイデンティティの発達 北大路書房
- 麻生武・浜田寿美男編 2005 よくわかる臨床発達心理学 ミネルヴァ書房
- 生越達 2002 場所の狭溢化と拡幅—「居場所」にとつての他者 茨城大学教育学部紀要 52号 367-386
- 大久保智生 2000 心理的「居場所」に関する研究—概念の検討と尺度の作成—日本性格心理学会大会発表論文集
- 小此木啓吾 1974 概説・アイデンティティ論 現代のエスプリ 78 アイデンティティ 至文堂 5-22
- 小沢一仁 2003 「居場所」を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工芸大学工学部紀要 23号 94-106
- 小畑豊美・伊藤義美 2001 青年期の心の「居場所」の研究—自由記述に表れた心の「居場所」の分類— 情報文化研究 第14号 59-73
- 河合隼雄 1999 いじめと不登校 潮出版
- 木村敏 1994 「居場所」について NTT出版
- 斉藤誠一編 2002 青年期の人間関係 人間関係の発達心理学4
- 斉藤学 2006 自分の「居場所」のみつけかた 大和書房
- 酒木保・小山内實 1990 心的固有空間「ここ」の成立と拡充 心理臨床学研究 第7巻 第3号 21-31
- 清水博 2004 場の思想 東京大学出版会
- 下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究—アイデンティティの発達との関連で— 教育心理学研究 40(2) 1-9
- 白井利明 1998 学生は「居場所」をどうとらえているか 日本

青年心理学会大会発表論文集

- 白井利明編 2006 よくわかる青年心理学 ミネルヴァ書房
- 杉村和美 1998 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究 第9巻 第1号 45-55
- 高柳真人 2000 児童・青年期における発達段階と「居場所」の関係 日本教育心理学総会発表論文集
- 竹森元彦 1999 心の発達における「居場所」の役割 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 第14巻 127-136
- 田中治彦編著 2003 「居場所」の構想 学陽書房
- 堤 雅雄 2002 「居場所感」覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要(人文・社会科学) 第36巻 1-7
- 富永幹人・北山修 2003 青年期と「居場所」 住田正樹 南博文〔編〕 子供たちの「居場所」と対人的世界の現在 九州大学出版会 381-400
- 中村泰子 1999 「居場所がある」と「居場所がない」との比較 -○△□法の基礎的研究として 大阪市立大学生活科学科 児童・家族相談所紀要 18 13-22
- 藤竹 暁 2000 「居場所」を考える 現代のエスプリ別冊 生活文化シリーズ3 現代人の「居場所」 至文堂 47-57